

3. 平成14年度幼稚園教育研究集会旭川大会提案資料

事例1 生活科単元の話し合い

4月中旬

附属小学校1年の担任K教師が幼稚園の教官室にきた。

K教師 「先生、相談があるんですけど」

I教師 「どうしたの」

K教師 「今年も去年みたいに、研究授業を利用して幼稚園の子ども達が参加できるような単元を設けたいと思ってるんですけど、幼稚園の方は都合がつきそうですか？」

I教師 「もちろんよ。きっと子ども達も喜ぶわ。それで、去年は国際交流だったけど今年はどんなことを考えているの？」

K教師とI教師の話に、同じく教官室にいた年長児担任のT教師とH教師が加わり、単元のことを話し合い始めた。

話し合いでは、今年は1年生としてバスマナーの単元を設け、生活に根ざした学びを保障したいという思いがあること（K教師のクラスの3分の2がバスを利用して通学しているという実態から）、その単元の一環として1年生が幼稚園の子ども達に、バスごっこを通してバスの乗り方を教えたいと考えたことがK教師から伝えられた。

その考えを受け、幼稚園側として

- ・年長児と一緒に活動すること
- ・単元構成について、事前に連絡を密にしながら共に考えていくこと
- ・バスマナー以外の単元（バスマナーの単元は、予定では11月中旬に行われる）でも、幼稚園と小学校の子ども達がかかわれる場をつくっていくことを提案し、確認し合った。

《考察》

1年生の担任教師が幼稚園まで足を運んでくれたことがきっかけで話し合いが行われた。そこで単元の構成から一緒に考えていこうと理解し合えたことが、私たちにTTの意識をいっそう膨らませたといっているだろう。このような方向で合意できた背景には、昨年、一昨年と幼小連携の活動を積み重ねてきて、その中でそれぞれの立場で、子ども達にとってより有意義な経験や学びを目指して、些細なことから大枠のものまで、もっとこうできたらいいという話をしてきたからだと言えよう。

事例2 アサガオを使った遊び

7月初旬

年長児にアサガオを使った遊びを教えてあげようと、附属小学校1年生2クラス約60名が幼稚園にやってきた。遊戯室に集まっている1年生の姿や「みんなおいで」という声かけで、保育室やテラスにいた年長児も集まってきた。

遊戯室には10以上の机が並んだ。一つ一つの机では、6、7人の1年生が集まり、アサガオを使った遊びの準備をしている。

頃合いを見計らって1年生の担任K教師が「幼稚園のお友達に教えてあげてね」と声をかけるが、1年生の多くは専らまず自分達が楽しもうという感じでたたき染めやしぼり染めなどに興じ始めた。年長児らはそのわいわいがやがや面白く楽しそうな様子をちょっぴり不安げながらも興味深そうに見入っている。その雰囲気を感じてか年中児の何人かもテラスの方から「一体何が始まるのだろう」といった感じで興味津々に様子を伺っている。幼稚園H教師は、年長児と1年生がいるグループに入り込み、アサガオの色水でクワガタの絵をかいた。子ども達は「おおー」「すげえ」「僕もかきたい」など、口々に話している。

その絵をヒントに自分で絵を描き始めた子ども達も出始めた。

そんな中、

C児 「先生、私もやってみたい」

年長児担任H教師の服を引っ張りながら小さな声で話しかけてきた。

H教師 「1年生のお姉ちゃん達が教えてくれるよ。聞いてみたらどう？」

C児 「だけど・・・」

H教師の後ろに隠れるようにしながらも、1年生がたたき染めをする様子をじっと見ているC児だった。

H教師 「ねえAさん、Cちゃんがたたき染めをしてみたいんだって。やり方教えてくれないかな」

1年生A 「うん、いいよ。こっちにおいで、どうすればいいか教えてあげるよ」

1年生B 「まずはこの紙を・・・」

C児は、1年生A児やB児に優しく手を取られ、目の前でやり方を教えてもらっていた。

その後C児は、1年生が帰った後、クラスで牛乳を飲む前に「ほらっ」といいながら、自分のたたき染めをH教師に見せに来た。

《考 察》

幼稚園の遊戯室に1年生と年長児合わせて約100名、そこに教師が5名（小学校2名、幼稚園3名）という状況の下でのTTだった。活動のイニシアティブは小学校教師がとり、幼稚園教師は従役で活動を支えた。

1年生60名のパワーに始め圧倒されていた年長児だったが、次第に場の雰囲気にも慣れ、自分の要求を小学生に伝えている幼児が多かった。そんな中、事例のようになかなか思いを伝えられない幼児もいた。そこで、教師が仲立ちとなり思いの橋渡しをすることで、やりたいことができた。C児に関して言えば、1年生が帰った後に、自分のつくった、たたき染めを教師に見せにきたことから、満足できたことが伺える。

また、10名前後のグループでの活動に教師が入り込み、表現者としてかかわれたこともTTならでのことだったのではないかと考える。子ども達にとっては、複数の教師とかかわり、いろいろな価値観を感じることができたのではないだろうか。

以上のことから、TTとしては、幼児に対する教師の役割として、①思いにより添う役割、②アイデアを提供する役割の二つがあることが見えてきた。

事例3 「やりたい？」

7月初旬

1年生の男児数人が年長児とのかかわりに戸惑いを見せていた。その姿を見た幼稚園I教師が彼らに話しかけた。

I教師 「ねえ、あなた達、向こうにうさぎ組って行って、3歳の子ども達がいるんだけど、そこでこの色水遊び教えてあげてくれない？」

男児ら 「わかった。いってみる！」

教師に促され、男児数人がペットボトル片手にうさぎ組保育室に向かった。

1年生A 「色水つくりたい人！」

1年生B 「こんな風に水をちょっとだけ入れて、あと、アサガオ入れて振るの」

1年生C 「あんまり水を入れすぎるとだめだよ」

1年生A 「やりたい？」

集まってきたうさぎ組の幼児らに話しかけるが、幼児らはその小学生達と水の色が変わる様子に圧倒され、ぼかんと口を開けて見ているばかりだった。教師が少し離れて見ていると、同じように少し離れて見ていたY児が教師のそばに近づいてきた。小学生が怖い

かと思つてY児を見ると、嬉しそうな表情で小学生のすることを見ている。

M教師 「Yちゃんもやってみる？」

Y児 「うん」

そこで、「この子もしてみたいんだって」といってY児を連れていくと、3人がかりで色水のつくり方を教えてくれた。

1年生A 「ペットボトル、持ってる？」

Y児 「(首を横に振る)」

1年生B 「じゃあ、これ(自分が持っているペットボトル)あげる。そしたら、ここに水を入れてアサガオ入れて・・・」

Y児は小学生のすることを嬉しそうに見ていた。そして、綺麗に色がついた水を見てもすませ嬉しそうな顔になった。

1年生B 「はい、これあげる。ペットボトルも家に持って帰っていいからね」

Y児 「(消え入りそうな声で)ありがとう」

もらったペットボトルをじっと見つめ、にっこり笑顔のY児だった。

I教師からうさぎ組に数人向かったことを聞いた小学校K教師は、遊戯室に戻ってくるよう伝えようと思っていた。しかし、一連のやりとりとその場の雰囲気、I教師からの「この子達、うさぎ組でしっかり教えていたわよ」という言葉で、考えを改めた。そして、「うさぎ組のお友達に教えたら戻っておいで」と伝え、遊戯室に戻っていった。

《考 察》

この事例は、上記事例2と同じ日の、3歳児クラスでのものである。遊戯室での活動に、今ひとつ馴染めず戸惑っていた数人の男児がI教師のかかわりによってうさぎ組に誘われ、そこで生き生きと活動し始めた。それは、積極的に3歳児に声をかける姿や、自分のペットボトルをあげるという姿から読み取ることができる。この時I教師は、1年生の男児数人が場の雰囲気に馴染めず、やりたいのにできない状況にあるのは、育ちに関係あるのではないかと捉えた。そしてこの子達が生きる場として、うさぎ組が適当ではないかと考えた。また、K教師にとっては、遊戯室で5歳児に教えて欲しいという思いがあり、呼び戻すつもりでうさぎ組に足を運んだのだが、その雰囲気やI教師からの「これでいいのよ」といった一言で、考えを改めた。

これらのことから、TTでの、幼児に対する教師の役割として、思いを方向付ける役割があることが見えてきた。加えて教師同士がかかわり、子どもの見方についての捉えを伝えあうことで共に子ども理解を深めていくことの重要性も見えてきた。

事例4 バスマナーの話し合い

9月初旬

K教師 「先生、今度のバスマナーの単元のことで相談に来ました」
小学校1年生担任のK教師が幼稚園の教官室にきた。

K教師 「単元の導入としてぷっぴーちゃん(修復された金沢城でのイベントである緑化フェアのキャラクター)に来てもらって、『遊びに来てね』って、声をかけてもらおうと思っているんです」

I教師 「幼稚園にもぷっぴーちゃんに来てもらうっていうわけにはいかないの？」

K教師 「大丈夫だと思います。いいですよ」

話は、単元導入の話から構成の話へと膨らんだ。取り立ててかしこまった形ではなく、教官室の中でのざっくばらんな立ち話からのスタートだったので、K教師からも幼稚園側からもいろいろなアイデアが出された。実際にバスに乗る際の安全は大丈夫なのか、そん

なときこそお母さん方の力を借りるとよいのではないか、お母さん方の中には力のある人たちがいっぱいいるよ、玄関まで本物のバスに乗り入れてもらってはどうか、その方がリアルで、子ども達も興味をもつのではないか、幼稚園の子ども達も玄関前にあるバスを見たら、見に行きたいと思うだろう、バスごっこにも意識が繋がっていきそうだななどなど。しばしば話は幼稚園出身の1年生の最近の様子などに脱線したが、授業をより楽しく、生活に密着した形で学びを保障したいという方向性は共通のものがあった。

K教師 「ありがとうございました。また、今の話を参考に考えてみます」

I教師 「こちらこそ。またいつでもきてね」

話は3時間あまりにも及んだ。

《考 察》

会議室で資料を持ち合わせて面と向かい合っただけの話とはまた違う、アットホームな雰囲気の中で話し合っただけだったので、アイデアもいろいろと湧いてきたように思う。また、事例では具体的に明記していないが、教官室での話し合いは、その場にいる他の幼稚園教師を必然的に巻き込んでいった。そこで、同意があったり反論があったりし、話がより深まっていった。

TTには、こういった話し合いが大事なのではないだろうか。子ども達と創る具体的な活動にかかわる前段階の部分である。子ども達の様子や育ちを考慮しながらどのように活動(生活)を創っていくか、その子ども達とかかわる複数の教師と共に見方や捉えを語ったり、考えや知恵を出し合ったりすることは、結局は子どもの豊かな生活経験なり学びなりにつながっていくと考える。実際、事例のように、異校種の教師の集まりは時間的な都合などで難しい面が多々あるが、価値あることだと思う。

この事例からは、TTにおける教師の役割として、①視点を広げる役割、②アイデアを提供する役割、の二つのことが見えてきた。

事例5 「バスに乗ってみたい」

10月下旬

T児 「先生、バスおるよ。中にはいってきとる」

いつも以上に大きな声で教師の所に駆け寄ってきた。

H教師 「本当。どれどれ」

話を耳にしたM児やH児と一緒に、T児に手を引っ張られながら、小学校の玄関が見えるところまで行くと、乗り合いバスが横づけになって止まっていた。

H教師 「近くまで行ってみる？」

幼児ら 「うん！」

幼児らと一緒にバスに近づくと、小学校K教師のクラスの子も達がバスの運転手から話を聞いていた。T児やM児らも座って話を聞き始めた。

K教師が、1年生の、運転手に質問していることをまとめる傍らで、幼稚園I教師が1年生の子ども達の見やすいと思われる位置に資料を提示したり、板書したりしている。

やがて、質問が終わり、実際にバスに乗って説明を聞くということになった。

H教師 「乗ってみたいねえ」

幼児ら 「うん！」

H教師 「頼んでみよう」

1年生が一通り乗り終えたところで幼児らと手をつないでK教師と運転手に乗せてもらえるか聞きにいった。

H教師 「一緒にバスに乗ってもいいですか？」

T教師 「いいよ。どうぞ」

幼児らとH教師はわくわくしながらバスに乗り込んだ。

H運転手「この鏡からはバスの中の様子が全部見えるんだよ」

M児は運転席に座らせてもらい、ハンドルを握りながら運転手の話に耳を傾けている。
T児、H児も順番に乗せてもらい、満足そうだった。

その日のお知らせタイム（クラス全体での活動）でT児とM児はバスに乗って楽しかったことをクラスみんなに身振り手振りで話していた。

《考 察》

この事例では3人の教師とバス運転手によるTTが行われている。主となる活動の場は乗り合いバスが乗り付けた小学校玄関前。1年生のバスマナーの授業の一コマである。事前の単元構成の話し合いで、本物のバスを利用するんだったら、幼稚園のテラスから見える玄関前に配置することはできないかと提案し、合意を得た。そうすれば自然に幼児らが関心をもつことができると考えたからである。従って、この日乗り合いバスが玄関前に来ることは幼稚園側の教師も全員知っていた。

案の定、バスに気づいた幼児がそのことを伝えに来た。その思いをくみ取り、バスの近くまでいき、さらにバスに乗せてもらったことで大喜びの幼児らだった。本物の運転手に説明を聞きながら運転席に座っているときの表情は、嬉しさと楽しさと真剣さが入り交じったようだった。現在、1年生になっている彼女らにバスの時のことを聞いたら、はっきりと覚えていると答えたことから、この経験が意味あるものだったといえることができる。

TTに着目すると、小学校K教師が授業を展開する中、幼稚園H教師は幼児ら数人と共にその場に行き、授業に周辺的に参加している。その場に関心をもった幼児らを支えることを中心に存在している。他方幼稚園I教師はK教師の思いや考えを察知しながら、1年生に分かりやすいように資料提示したり、板書したりしている。共に授業を創る従的立場として振る舞っているのがわかる。さらに、バス運転手はK教師主導の下、1年生や園児に説明をしたり、質問に答えたりしている。

上記のことを踏まえると、この事例でのTTの幼児に対する教師の役割として、①思いに寄り添う役割、②思いを方向付ける役割、③状況を変える役割の三つが見えてきた。

事例6 「バスの乗り方教えてあげます」

11月初旬

弁当後、小学校K教師と一緒に1年生1クラス全員が幼稚園にやってきた。ほし組（年長児）の幼児らも、担任の教師から1年生が来るということを知り、グループ毎に列になって待っていた。

1年生A「ほし組のみなさん、こんにちは」

1年生B「僕たちは1年1組です」

1年生C「11月15日、僕たちのクラスでバスの乗り方を教えてあげます」

1年生D「みんなできて下さい」

その言葉を聞いて、ほし組の幼児らは嬉しそうである。「小学校に行けるんだ」「バスに乗れるんだって」といったつぶやきがあちこちから聞こえた。

1年生E「こんなカードをつくりました。みんなにあげます」

1年生F「今度来るとき持ってきてね」

1年生は幼児らにあわせて7つのグループに分かれており、それぞれのグループ毎に幼児ひとりひとりに手渡しでカードを配り始めた。

H児「バスマナーカードだって」

J児「名前も書いてある！」

幼児らの関心がさらに高まったようである。

T教師はホワイトボードに『おにいさん、おねえさんにバスののりかたをおしえてもらおう』とかき、当日を楽しみにすることにした。

《考 察》

この事例のポイントは1年生が7つのグループに分かれて幼稚園に来て、幼児ひとりひとりにカードを渡したことだろう。そのことで、幼児らの「小学校に行ってバスに乗ろう」という意識がぐっと高まった。同時に、1年生はそんな幼児らの姿から「自分達が教えてあげるんだ」という自覚をさらに強くした。このような姿が見られたのは、背景にTTがあったからである。事前に小学校K教師とT教師が話し合い、幼児の育ちや今の生活状況に応じた配慮をした。具体的には、幼稚園側のグループ数に合わせたこと、カードという「もの」を利用したこと、簡潔な言葉かけと短い活動時間だったことが挙げられる。このような、話し合いによる子ども理解の深まりと、その伴う育ちを考慮した配慮がTTにとって重要であることが見えてきた。

事例7 「積み木貸してくれる？」

11月中旬

年長児がバスの乗り方を教えてもらえる前日、幼稚園I教師はわくわくしながら1年生のクラスに足を運んだ。1年生がバスをつくることをK教師から聞いていたからである。

授業が始まり、K教師と共に1年生の子ども達が二つのグループに分かれてバスをつくり始めた。それぞれ自分達なりに考えながら座席やステップ、料金箱、入り口、出口などをつくっていたが、年長児らにとって、「バスだ」と思えそうなものではなかった。

I教師 「なんだか、バスっぽくないわねえ」

K教師 「そうなんです。なにかこう、すっきりしないんですよねえ」

I教師 「K先生、ちょっと、子ども達を集めてもいい？」

K教師 「はい、いいですよ」

I教師 「みんな、ちょっと集まってくれる……。これだったら、年長組にバスだってよくわからないかもしれない」

子ども達「……」

子ども達の間から「だって、なんにもないもん……。」「といったつぶやきが聞こえた。

I教師 「あなた達、バスをつくるときに、何か使いたいものある？」

1年生A 「段ボールがほしい」

K教師 「段ボールはちょっとしかないんだけど……。I先生ありますか？」

I教師 「幼稚園にいっぱいあるよ。使ってもいいよ」

子ども達目が輝きだした。

1年生B 「先生！幼稚園の積み木ダメなの？貸してくれる？」

I教師 「いいよ。マルチパネっていうのもあるよ」

子ども達は、水を得た魚のように次から次へと要求を出してきた。幼稚園のものが使えるということがいっそうイメージを膨らませたようだ。

I教師 「Cちゃん、あなた積み木やマルチパネがどこにあるか知ってるでしょ。グループのみんなに教えてあげてね」

1年生C 「わかった！よし、みんないこうぜ」

子ども達は生き生きとした表情で幼稚園に足を運んだ。使えそうな材料を調達し、グループで協力しあってバスをつくり上げた。

《考 察》

この事例は、幼稚園I教師と小学校K教師のTTが展開されている、1年生の授業の一コマ

である。I教師が1年生のクラスに足を運ぶと、授業の雰囲気は今ひとつ重たく、K教師も子ども達も悩んでいるようだった。加えて、子ども達がつくったバスは年長児の育ちに合っていないと思えた。さらに、年長児が1年生のクラスに入るとき、普段使い慣れたものがあつたら、幼児らにとって少しでも親しみやすい場になるのではないかと考えた。そこで、K教師と一緒に授業をつくっていった。

I教師がかかわることで状況は一変する。I教師の存在や発する言葉から1年生が幼稚園教師の背後に「もの」を見たのである。幼稚園にあるものをふんだんに使ってもいいんだという思いが、やる気を引き起こしたといってもいいだろう。子ども達は使いたいものをどんどん要求し、勢いよく調達に向かった。そして、バスをつくりながらさらに必要なものに気付き、イメージを具現化していったのである。

ここでのTTでは、幼児に対する教師の役割として①状況を変える役割、②アイデアを提供する役割の二つが見えてきた。幼稚園教師が授業にかかわり、主の役割をしたことで状況が一変したのである。また、1年生担任教師と共に、考えたり指示したりできたのは、教師同士が互いにその存在を尊重し、よりよい活動に向けて行動したからに他ならない。TTでは、場に対等に存在していることが大切だと言ったことが見えてきた。

事例8 バスごっこ

11月中旬

年長児が1年生の拍手に迎えられ、バスごっこの授業が始まった。

1年生A「幼稚園の皆さんこんにちは」

幼児ら「こんにちは」

1年生B「今日は一緒にバスごっこをしましょう」

みんなの前で話す二人はさすがに緊張気味である。

K教師「幼稚園のみんなの中で、バスに乗ったことある人手を挙げてみて」

幼児ら「はい」

K教師「では、このお部屋の中にバスがあるの、わかりますか？」

幼児ら「わかるー」

K教師「今から幼稚園のお友達だけでバスに乗ってもらいます」

O児「やったー」

幼児らは今日の運転手や整理券係の人の紹介を聞いてから、早速バスに整理券をとって乗り込んだ。そして、おりた後1年生から乗り方についてどうだったかを聞いた。

1年生C「座りながら吊革をたたいていた人がいたよ」

1年生D「整理券をとっていない人がいたよ」

1年生E「運転手さんにありがとうっていっていなかった」

一通り考えを聞いた後、1年生の、バスの乗り方についてクイズを織り交ぜながらの説明が始まった。

K教師「さあ、始まるよ」

T教師「ほし組さんいいですか。こちらのバス見てね」

T教師は1年生の説明を聞きながら板書に書き込んでいる。K教師は1年生の説明する姿を見守りながら、援助の姿勢を保っている。

K教師「さあ、幼稚園のお友達、わかったかな？」

幼児ら「はい」

T教師「すごくお兄さんお姉さん達はつきり教えてくれたんですが、みんなどうですか」

幼児らのできそうだという思いを聞き、次は、1年生と一緒にバスに乗り込むことになった。今度は1年生に付き添われながら、整理券を取り、「ありがとうございました」といいながらバスを降りる幼児がほとんどだった。ニコニコ顔の中に、時折真剣な表情が混じっている。全員がバスから降りたところでT教師が言った。

T教師 「ねえほし組さん。お兄ちゃんお姉ちゃんに教えてもらって思ったことありますか？」

Y児 「楽しかった」

H児 「面白かった」

K教師 「1年生のみんな、よかったねえ。幼稚園の年長組さん、楽しかったって」この後、みんなでもう一度バスに乗り、雰囲気を楽しんだあと、一緒に歌を歌いながらお別れをした。

《考 察》

バスごっこの授業前に教師同士で話し合ったことは、授業の流れの確認と、その際、板書をT教師がすること、全体の場では1年生に対してはK教師、園児に対してはT教師が主として声をかけるが、状況に応じながら臨機応変に対応していこうということだった。事前の綿密な話し合いが、幼稚園及び小学校双方の子ども達の主体的で楽しい活動ぶりにつながっていったのではないだろうか。それは特に、幼稚園と小学校の子ども達と一緒にバスに乗り込んだときの、楽しさの中に時折見えた真剣な表情から伺うことができる。

この事例のTTでは、事前の打ち合わせはもちろんのこと、日頃の、子ども達に思いを馳せた、育ちや様子の情報交換、それによる子ども理解の深まり、そこで培われた信頼関係が、TTで、あうんの呼吸として表れ、それが、子ども達の充実した生活へと結びついていく、ということが見えてきた。

事例9 バス通学

4月下旬

新学期が始まり、1年生と一緒にバスごっこを楽しんだり、ゲームランドを自分達でつくりあげた年長児も、新1年生となった。4月当初には下校時にピカピカの制服姿を嬉しそうに見せに来ていた彼らも、だんだんと小学校での生活に慣れてきているようだった。

そんな中、1年生担任の教師を先頭に、列をつくってバス停まで歩いている子ども達の姿を見ながら、幼稚園の教官室では、今年の1年生のバス通学はどんなものなのか話題になった。そこで、教師が小学校まで出向き、1年生の担任にその様子を伺ってきた。

1年生の担任をしている先生の話によると、今年は例年になくバス通学に関してのトラブルが少なく驚いている、ということだった。学年の3分の2が幼稚園出身者なので、気になっていたがその話を聞き、幼稚園教師みんなが嬉しく思い、また、ほっとしていた。

《考 察》

この事例からは、まず、幼小連携の活動の意味について考えさせられた。例年に比べてバス通学に関するトラブルが少ないという事実から、年長児の時のバスごっこの活動が生きているということが言えよう。もちろん、そのことだけがポイントというわけではないだろう。おそらく、家の人と一緒にバスに乗る練習もしていたと思われる。しかしながら、就学時健診も終わり、小学校への意識が高まりつつあった11月中旬に、1年生の教室でバスごっこをしたという経験は、少なからず今の姿に影響していると思われる。そう考えたとき、単元構成から幼稚園と小学校の枠をはずして共に考え、TTをしながら活動を積み重ねたことに意味があったと言えるだろう。

(3) バスごっこ活動

緑化フェアへ行く話し合いを行ったところ、バスの中のことやバスを降りてからの歩く点に不安があるという児童が多かったので、まず初めにバスごっこ活動を取り入れた。

黒板の前に、児童の椅子を座席代わりにし、バスの運転席は教師の大きい椅子を使うだけの簡単なバスのセットからスタートした。

活動がスタートするなり、次のような反応が出てきた。

バス停がないよ・整理券箱があるよ・整理券もいる・ブザーがいる・料金箱がある
料金表がある・つぎ おります の表示がある・運転席にハンドルがある

日頃からの経験が生かされた話し合いとなったが、それでも友達と意見の食い違う点が出てきたので、再度バスに乗った時に確かめてくることにした。

バスごっこをする中で車内放送を流したところ、臨場感が生まれ児童の意欲を高めることにつながった。そして、演じる側と見る側に分けたことで、バスの整理券を取らずに乗る、乗車中におしゃべりをするなどのバスマナーに対する問題点を客観的に見つけ出し、意欲的に話し合いを進めることができた。バスごっこのように何かになりきって役を演じることは、低学年の児童にとって問題点を見つけどうしたら良いのかを考えるのにとっても効果的であるとわかった。

また、幼稚園児にバスの乗り方を教える際にも、バスごっこを取り入れた。1年生なりに幼稚園児のことを考え、幼稚園児に届く高さでつり革を作ろうとしたり、より本物のバスらしくしようと熱心に作ったり、バスの定期を作って幼稚園児にあげる等の工夫が見られた。

1年生が幼稚園児とごっこ活動を通してかかわっている姿を見ると、「大丈夫。こうするんだよ」「もう一度やっごらん」などの優しい声かけや、幼稚園児に嫌なことを言われても笑って済ませる心のゆとりさえ見られ（同学年なら、けんかになる場面であるが）、お兄さんお姉さんという意識を持ってかかわっていることがわかった。幼稚園の子との活動の後、「かわいかった」「また、遊びたい」などの感想も見られ、自分より年下の子を慈しみ可愛がる心を培い、年下の子とのかかわり方を学べる点で、幼稚園児とのかかわる場でのごっこ活動は意義深いと考える。

今回幼稚園の先生と何回も話し合いを持ち、実際に授業の様子を見に来ていただいたりもした。そんな中、椅子と机と段ボールだけで作業していた児童を見て「バスを作るのに幼稚園の積み木や大形ブロックを使っては」とアドバイスをいただいた。附属幼稚園児が先頭を切って取りに行き、活動の様子は今までのとは違って、生き生きと目を輝かせダイナミックなバスとなり、児童が工夫する場がたくさん増えたのである。積み木とブロックの利用が、こんなに児童の活動意欲を刺激し、創造活動を生むものだと気づけなかった。幼稚園の先生は、日頃から園児が積み木やブロックを利用して生き生きと活動している姿を見ていらっしやるので、すぐにアドバイスをすることができたのである。しかも、園児が完成したバスに興味を持つか、そして1年生とバスごっこをした後で、自分達もバスを作ってみようと意欲を持てるためにも積み木とブロックの利用は必要であると判断したのである。このように、1つの活動が教育的により効果的になるには、小学校の教師と幼稚園の先生との両方の目でもの見、経験を生かし知恵を出し合い情報交換しながら連携をすることが大切であると思った。実際、幼稚園児はこの活動に興味を持ち、本物のバスに早く乗りたいと意欲を持ってくれた。

(興井 綾子『身近な素材を人とのかかわりを通して生活化していった実践例』より抜粋)